

## 通常の学級の児童が障害について学び理解を深めるための 教材と学習プログラムの開発(2) ー 6年間の学習のまとめとしての高齢者疑似体験学習ー

### I. はじめに

筆者らは小学校の通常の学級において1年生から6年生まで6年間を通して展開する障害理解授業「やさしさってなんだろう？」を実施中である。本研究では、この学習プログラムで6年間学んだ児童たちに焦点をあて、最終の学習である高齢者疑似体験学習における児童の変容を報告する。

### II. 方法

#### 1. 本授業の6年間全体のねらい

本授業6年間のねらいは以下の2点であった。

- ①自分の周りには色々な立場や状況の人がいることを知り、自他の違いを正しく捉える。  
(障害や高齢者の疑似体験、その人たちとの対話を通して不便な状態を知る。困っている人を目の前にして自分は何ができるか、どうしたいかを考える)。
- ②相手を認め、やさしさについて考える。  
(相手の立場や状況を判断し、その気持ちや行動を考える。世の中は「助けられたり助けたり」という関係で成り立っていることを知る)

#### 2. 授業対象と5年生までの学習

授業対象はA小学校6年生全2学級の児童であった。

児童たちは1, 2年生では道徳や生活科の時間において、日常生活におけることばやきこえの大切さを簡単な体験を通して学んだ。

3年生からは「総合的な学習の時間」において、各学年1主題(3年で視覚障害、4年で聴覚障害、5年で車いす体験)について学習を繰り返してきた。

各学年での学習は、【基礎知識の学習】、【障害疑似体験】、【調べ学習】、【障害のある人との出会い】、【まとめと意見の発表】の5内容で構成された。

#### 3. 6年生における高齢者疑似体験学習

##### (1) 授業の構成

5年生までの学習と同様の5内容で構成した。

- ①高齢者に関する基礎知識を学ぶ
- ②高齢者疑似体験を行う
- ③高齢者の暮らしや支援について調べ学習をする
- ④高齢者施設を訪問したり、高齢者の方に来校してもらい話を聞く
- ⑤体験内容や体験を通して自分が考えたことをまとめ発表する。

表1 高齢者疑似体験学習計画

| 時数 | ねらい                   | 内 容                                | 指導担当           |             |
|----|-----------------------|------------------------------------|----------------|-------------|
|    |                       |                                    | 通常<br>担任       | 通級<br>担当    |
| 2  | 学習計画を知る               | ・本年度の学習のねらいと概要、進め方等について話を聞く        | △              | ○           |
|    | 高齢者に関する基礎知識を知る        | ・高齢者の定義、割合、身体的変化、心理的变化など、統計を基に話を聞く |                | ○           |
| 1  | A<br>ブ<br>ロ<br>ッ<br>ク | 既存の体験を基に自分で体験を組み立てる                | ○体験内容の確認など     | ○体験器具の用意など  |
| 1日 |                       | 一日体験を行う                            | ○              |             |
| 1  |                       | 疑似体験に関するまとめを行う                     | ○              | △           |
| 3  | B<br>ブ<br>ロ<br>ッ<br>ク | デイケア施設の存在を知り見学をし通所高齢者との交流をする       | ○話し合い素材や道具の用意等 | ○デイケア施設との渉外 |
| 2  |                       | 学区内の老人会の方々と交流する                    | ○話し合い素材や道具の用意等 | △管理職との調整    |
| 5  |                       | 自分の考えをまとめる                         | ○              | △           |
| 1  |                       | 発表する                               | ○              | △           |

指導担当欄の「○」は主担当を表し、「△」は副担当もしくは、記録担当を表す。

## (2) 手続き

授業の展開にあたっては、これまでに学習した知識や体験を生かせるよう、今年度、次のような新たな学習方法を試みた。

- ①疑似体験では、登校時から下校時までの「1日体験」をクラス内で数人ずつ（全体で一週間）を行う。
- ②疑似体験では、弱視ゴーグル、手袋、手足おもり、肘や膝の機能を制限する道具等を利用し、高齢者になったイメージを持って体験内容を組み立てる。
- ③疑似体験をしていない児童たちは、疑似体験中の児童の様子を観察し、体験中の児童の「help!」によって行動を助ける。
- ④高齢者とふれあう機会を2度設定する。
  - ・デイケア施設を訪問し、通所される高齢者とのふれあいの時間を持つ(表2)。
  - ・学区内の老人会の方々を学校に招き、高齢者の方と児童とが小グループにわかれ校内周辺の変化の様子や住みよい町作りについて話し合う。
- ⑤これらをもとに、住みよい町について考える。また、高齢者とのかかわり方について意見をまとめ、発表する。

表2 高齢者施設での学習活動内容

1. 高齢者施設見学と施設担当者の方のお話  
時間 10:00～10:30 頃
2. 施設を利用されている高齢者との話し合い  
子ども2名について高齢者の方1名、または、1名について1名  
時間：10:40～11:00 頃
3. 子どもたちの質問に対する担当者からのお話  
時間：11:00～11:20 頃

### (注意事項)

- ・プライバシーや身体の手帳に関わる質問はしない。
- ・自己紹介やお話を主とするが、トランプなどの簡単なゲームをも行う。  
その際施設職員の方に援助していただく。

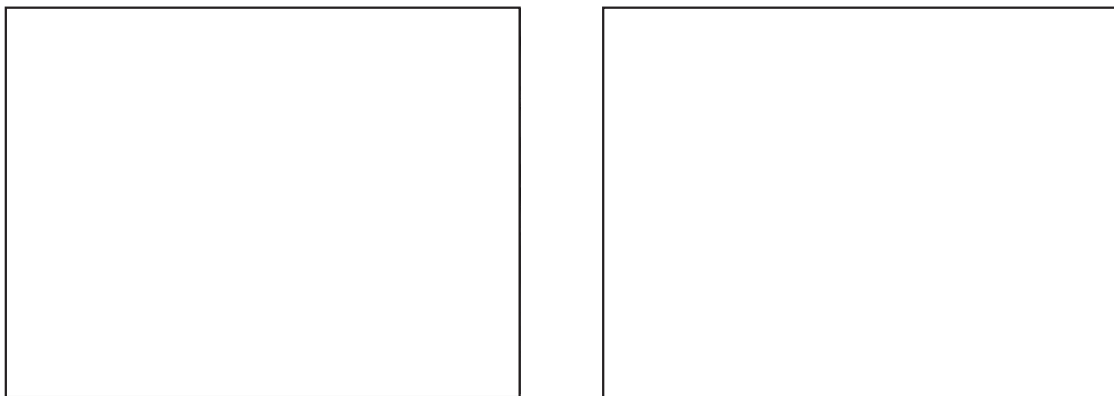


写真1 高齢者疑似体験

弱視ゴーグル、耳栓、軍手をして本を読む(左)

手首、足首に重りを、膝には動きを困難にする装置を装着し調理する(右)

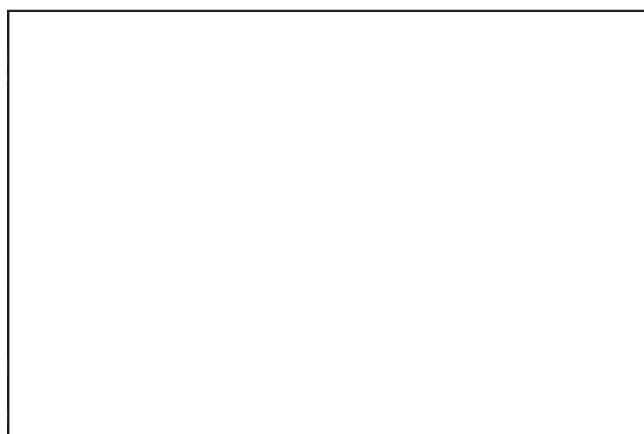


写真2 高齢者とのふれあい

これらの学習は、全体を約 15 時間で計画した。実際には、情報教育の授業時間とあわせて 20 時間以上を必要とした。

### (3) 授業者の協働

本授業の展開にあたっては、通常の学級担任が主体になり、学級経営に活かす授業構成や内容を模索した。特に、クラス内での「一日体験」やデイケア施設訪問、老人会の招待等は、通常の学級担任の発案によるものであった。通常の学級の担任は、筆者ら通級指導教室担当者主体の障害理解授業を 2 年間経験しており、それをふまえて、本授業に積極的に参加した。通級指導教室担当者は、導入時の障害に関する基礎事項の学習や疑似体験の体験内容について発案と補助、デイケア施設との連絡調整を行った。

### Ⅲ. 授業の結果

本授業では、毎時間後に児童たちにワークシートへ感想を記入してもらった。ここではその内容から、本授業の結果を検討する。

#### 1. 1日高齢者体験をして

児童たちは、疑似体験開始直後は体験を楽しんでいたが、長時間の体験で、不自由さや疲労を強く感じた。

記入例)・最初は楽しかったけれど、どんどん足は疲れて手はかさかさで自分の体じゃない様な気がした

また、長時間の体験のあと、体験をふまえ、高齢者の行動特性を理解しようとし始めた。

記入例)・高齢者が電車から降りるとき遅いなあと思ったけどそれは仕方がないということがわかりました

・文字を読む時、顔を近づける事に納得しました

#### 2. 高齢者と接して

日頃、高齢者と接する機会が少ない児童たちが、高齢者と接した喜びを率直に表現下感想が多く見られた。

記入例)・高齢者の人は「こわい」というイメージがあったけど、遊んでみたら楽しかった

また、相手の反応を実感すること自分の気持ちも変わることを実感した。高齢者の方たちが一方的に「してあげる対象」ではなく、相互のやりとりを楽しむ相手であることに気づいた。

記入例)・最初はとまどっていたけれど、どんどんえがおになってくれました

・話したりしていると楽しくなってきた相手も楽しそうにしてくれたからうれしかった

#### 3. 未来の町のテーマ

学習のまとめとして、児童たちに「未来の町」についてキーワード1語で表し、その説明を求めた。

キーワードには「声をかける」「助ける」のように高齢者を一方的に支援対象とするものもあったが、「声をかけあう」「助け合う」「交流」をキーワードとし『高齢者も若い人も声をかけあいながら助け合うことが大切』『年若い人も外で元気に遊んだり見ず知らずの人と交流できたりすればいいと思います』と記述するなど、同じ人間として相互に対等にかかわりあいコミュニケーションすることの大切さに言及した記述の方が多数見られた。

#### IV. おわりに

児童たちは6年間の学習のまとめとして、お互いのコミュニケーションの大切さを強調した。さらに言えば、高齢者と自分たちとの違いも知った上で、同じ人間としてのかかわりの大切さを述べたとも言える。

5年生までの学習では障害を軽減する道具や装置への言及が多数であったが、今回それは少数であった。その理由は、高齢者の方とコミュニケーションを楽しむ機会を得たことにあると考えられる。

また、その前提として、疑似体験を通して障害状況にある人の気持ちを考える学習や、障害のある人と出会って主体的に生きる姿に触れる経験を過去5年間繰り返してきたことが大きく影響していると思われる。

## 地域にお住まいのご高齢の方々との話し合い

日 時:平成17年2月15日(火) 3、4時間目

目 的:6丁目老人会の方々との話し合い

「私たちが住みよい町」について話しあう



今回は、「障害」という枠を取り外して話しあいましょう。  
私たちは学校にいと みんな同じ年代の人ばかりいるような気がします。  
でも 実際はそうではなく、私たちの社会(町)は生まれたばかりの赤ちゃんから  
100歳を超えるご高齢の方々まで、実に色々な人たちで構成されています。

初めに、ご高齢の方々  
「私たちだれもが住みよい町」ってどのような町かを話しあいましょう。  
高齢者の方々は色々な意見を持っておられると思います。それを聞きましょう。

そしてそのことについて自分の意見や考えを話しあってみてください。  
その時に頭の中で 以前勉強した三つの対策を思い出してください。  
意見を出しやすくなると思います。

- ①医療(治療や薬)の進歩で対応できること
  - ②科学技術(建物のづくり、町の作り、IT技術など、バリアフリーに関係するもの)  
の進歩で対応できること。
  - ③人と人とのつながり方で対応できること
- 話し合いの結果は裏のメモにまとめておいてください。名前を忘れないように。

### 方 法:

3時間目は、高齢者の方々とは仲良くなる時間にします。

おそらく子ども4人に対して1人の高齢者方が来てくださいます。

前回のデーケア施設ではせっかく用意してもらったものが使えなかったのもので、  
今回はそれらをもう一度用意してください。

しかし、無理にその遊びをつかうのではなく、その場の雰囲気が高齢者の方々と  
相談をして決めて下さい。

もしかしたら 高齢者の方は別のお考え(たとえば昔の鶴川の様子などを話して  
下さるかもしれません)柔軟に対応して下さい。

4時間目頃からは、上に書いた「私たちが住みよい町」について話しあってください。  
司会を決めておきましょう。

※高齢者と出会ったり、話し合いが終わったりするときは、挨拶をするのは当然の行動です。

## 地域にお住まいのご高齢の方々との話し合い

氏名:



I .3時間目どんな方法で仲良くなったか。高齢者の方の様子をみてどう思ったか？

II .4時間目について。

①高齢者の方々が望む「私たちにとって住みよい町」とはどのような町だったか？

②どのような意見を出し合ったか？

③この話し合いを通じて あなたはどんなことを学びましたか？